

Title	The Sustainability of Historic Environment Composed of Wooden Traditional Houses in the City of Java
Author(s)	Wikantari, Ria Rosalia
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42360
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ういかんたり りあ ろさりあ Wikantari, Ria Rosalia
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 16270 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科環境工学専攻
学位論文名	The Sustainability of Historic Environment Composed of Wooden Traditional Houses in the City of Java (ジャワ島都市における木造家屋によって構成された歴史的環境の持続可能性)
論文審査委員	(主査) 教授 鳴海 邦碩 (副査) 教授 舟橋 國男 助教授 澤木 昌典

論文内容の要旨

本論文は、ジャワ島都市において固有の環境特性を持つ、木造家屋によって構成された歴史的環境の変容の望ましい方向を探ることを目的に、ジャワ島において典型的な環境を形成していると考えられるクドゥス市の歴史的な中心地区を対象に、地区の空間構成および伝統的木造家屋の実態、さらにはそれらに対する住民の評価や保存への意向等の分析を通じて、歴史的環境の持続可能性とその支援方を論じたもので、内容は序章および本文6章からなる。

序章では、地域性に配慮した環境デザイン理論の確立が必要とされているインドネシアの状況、および本研究の目的と論文の構成について述べている。

1章では、クドゥス市の歴史的な中心地区の形成過程および空間構成、伝統的木造家屋の実態および環境特性について実態調査に基づき考察するとともに、日本、台湾、中国およびインドネシアにおける伝統的木造家屋地区の特徴を概観することを通じ、アジアの歴史的な環境の特徴と変化傾向について論じている。

2章では、調査対象地区における伝統的木造家屋の建築形態、材料、木彫装飾、構造、空間構成、空間利用に関する実態調査を行い、さらに伝統的木造家屋および非伝統的の家屋居住者を対象として、伝統的木造家屋の評価、保存意向を意見聴取調査に基づいて分析し、伝統的木造家屋の保存の可能性を考察している。

3章では、調査対象地区の環境特性である路地や共用通路の形成プロセス、空間構成、所有権等に関する実態調査、および伝統的木造家屋および非伝統的の家屋居住者を対象とした路地・共用通路の利用実態、評価、保存意向等に関する意見聴取調査の結果分析を通じて、このような環境特性の保存の可能性を考察している。

4章では、地区居住者に環境要素を示す写真を提示し、これに対する認識、嗜好、保存意向に関する意見聴取調査を行い、その結果の分析によって、地区の伝統的な都市景観イメージを決定づける環境要素を抽出している。

5章では、地区住民に対する参加型まちづくりに関する意向調査、および伝統的木造家屋築造を担う職人の業務実態等に関する調査の結果分析、さらに日本のHOPE計画の概念や施策事例に関する調査結果の考察を通じ、歴史的環境の保全を通じた地区コミュニティの活性化の可能性について考察している。

6章では、以上の知見から、ジャワ島都市における木造家屋によって構成された歴史的環境の持続可能性とその方途について論じている。

論文審査の結果の要旨

インドネシア、とりわけジャワ島においては、急速な近代化・都市化が進行しており、固有の歴史的環境の継承に取り組むことが緊急的課題であると認識されている。しかし、経済的な基盤が脆弱なインドネシアにあっては、先進諸国におけるように十分な公的資金によって歴史的環境保全を支援することは困難であり、コミュニティの内発的な力に期待されているのが実情である。また歴史的環境を構成する伝統的木造家屋は、熱帯の気候下にあつて、その長期的な存続が極めて困難な状況にあり、保全・継承の概念そのものも問われている。このような状況を背景に、本論文は、ジャワ島において典型的な環境を形成していると考えられるクドゥス市の歴史的な中心地区を対象に、地区の空間構成および伝統的木造家屋の実態、さらにはそれらに対する住民の評価や保存への意向等の分析、加えて伝統的木造家屋築造を担う職人の業務実態調査等を通じて、新たな保存の概念さらには保存の手法の定立を目指したものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1)1911年時点の地図と現在の地図とを照合することによって、地区中央で十字に交差する主要街路から路地が分岐しこれに宅地内の共用通路がつながるといふ歴史的な中心地区のアクセス網の構成、とりわけ路地および共用通路の構成は、元来、村所有の土地に居住者が権利を得て家屋を設ける過程で形成されてきた可能性があることを示唆するとともに、聴取調査により、個々の宅地へのアクセスは、64%が路地、36%が宅地内の共用通路であること、さらに、路地となっている土地の60%が公共所有であり、残りが私有であることを明らかにしている。
- (2)伝統的木造家屋に居住しているか否かにかかわらず、居住者は伝統的木造家屋に美的な価値を見出すと同時に、家屋および敷地の空間構成は実際の生活様式に適合した実用的なものだと考えており、伝統的木造家屋を好む傾向ならびにその特質を維持しながらの改修に対する支持意向は、若年世代および自営業主において高い割合を示し、伝統的木造家屋の保全が図られる可能性があることを明らかにしている。さらに、まるごと売却された伝統的木造家屋8棟、部分的に売却され2棟の売却理由の調査から、部分的な売却は当座の現金が目当てであり、丸ごとの売却は遺産分割のための解決策であることを明らかにしている。
- (3)居住者の環境認識から考察すると、伝統的木造家屋が一棟のみで存在する場合は、建築形態、材料、木彫装飾、構造が全体的に保存されていることによって伝統的と認識される傾向にあり、一方、家屋群として景観的に見た場合、少なくとも形態が保存されていれば伝統的と認識される傾向があることが明らかになった。
- (4)90%を超える居住者が伝統的な通路空間である路地・共用通路の存在を受け入れ、過半の居住者がその快適性や利便性を好み、また、伝統的なアクセス空間の特性の存続を、伝統的木造家屋の景観の存続以上に望んでいることが明らかになった。また、伝統的木造家屋の材質の変更はやむを得ないとする傾向にあるが、伝統的なアクセス空間の景観に表れる家屋の材料、塀の材料としての木材は、必要欠くべからざるものと感じていることが明らかになった。
- (5)居住者は、今後も自ら伝統的木造家屋の改修を行うつもりであり、また、近隣グループによる居住環境改善への参加意向も高く、加えて、地区内に存在する木彫工房の職人は、伝統的木造住宅のすべての部材を生産することが可能な状況にあり、地区の環境改善への参加意向が高いことが明らかになった。
- (6)以上のような知見を踏まえて、さらに伝統的木造家屋の部材のリサイクルや観光化の促進による経済基盤の充実の可能性に関する検討を加え、居住者の自主的な参加や木彫職人の参加を得ることによって、地域コミュニティの活性化を通じた歴史的環境を存続させる手法の可能性を示唆している。

以上のように、本論文は、ジャワ島都市の歴史的環境の空間構成およびそれを特徴付けている環境要素を抽出し、木造家屋によって構成される歴史的環境の持続可能性について、住民ならびに伝統的木造家屋築造を担う職人の意向調査等を踏まえ考察し、ジャワ島都市の状況に即した提案を行っており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。